

どこまでも遠かった村

よそ者とダンの少年

真島一郎

1

あさいねむりからさめて外にでると、たちならぶ円形の小屋のむこうに森がつづく、見なれぬ風景がひろがっていた。雨をきざす風が、やわらかく顔をさすりながら、しきりにわたっていく。記憶しておくべきかもしれないこの朝に、コートジボワールにやってきたのが4カ月まえ、アビジャンを700キロ離れてダン族の国に入ったのがひと月まえと、ひとり反芻してみる。この2週間は、大雨季の悪路のなか、フィールドワークで住む村をさがしまわり、さしたる理由もなく、この美しい山奥の村ディヌーをえらんでいた。隣国リベリアと境を接するヌオン川は、ここからわずか2キロほど先で流れている。国境の山道にとうていかなわぬ76年型のルノーは、6キロ手前の村に乗り捨ててきた。だから街道に出るには、これから毎回、往復12キロの山道を歩かねばならない。それでも住みたくなる何かが、ディヌー村にはあるような気がする。だからこそ、予め長老たちの合議で住み込む許しがおろしたうえで、昨日、よそ者はようやく村入りをはたしたのだ。

昨晚、小屋で身をよこたえていると、村のあちこちをふれまわる男の太い声が、突として響いてきた。「白人が村にやってきた。あすの朝、その場で集会があるから、すべての者が加わるように」と、しかるべき役目の者が、村中を告げまわっているのだという。この言葉では、膚の色が明るければフランス人も日本人もみな、よその遠い土

地からやってきた「しろ膚：白人」と呼ばれるのだとも教わる。深更になり、今度は太鼓のみだれ打ちや、歌や、群衆のざわめきが、とおく、ちかく、耳にとどいてきた。それからいつとも知れず茫茫としはじめ、体は藁ぶとんに沈んでいたらしい。意識の一部がつねにはたらいっているような、村入り第一夜のそんな悩ましいねむりから、よそ者はつい今しがた解かれて、こうして立っている。

2

朝の広場には、もう村びとが集まりかけていた。あちらこちらで群れてかたまる男たちや女たちがいる。杖をおいて地べたにすわる老人がいる。珍しいもの見たさの子供たちがいる。白人はついに正面に呼び入れられる。隣りにはフランス語とダン語の通訳をつとめる青年が、村長に命じられて座る。こうして、いまやその場は「やってきた白人」をめぐる村の集会という態になり、ぐるりと取り巻く群衆の視線が、白人の一身に集中することとなる。そうではないのだ、ここは1988年のコートジボワール共和国なのだ、とつとめて自分に言いかせねばならぬ光景が、眼前にひろがっていく。やがて村長のゼンが広場中央に歩みでて、身ぶり手ぶりの大声でよそ者の白人を指さしながら話しはじめた。「ところで、誰がこのよそ者の後見人になるのか?」。この問いかけが、移入者をうけ入れる際の、ダン族の伝統的なしかたであることを、この時点でのよそ者はまだ知らない。議論のすえ、ヴィトーと名乗る壮年の男が、住居や食

事など、よそ者にかんする一切の責任を負うこととなった。ゼンはそのあとで、村の全員になにか話しておきたいことがあるかを白人にたずねた。白人は精一杯の毅然たる外見をよそおい、祖国ジャボンのことや、村にすまうわけを説明したあとで、とっさに「みなさんの身内としてあつかってくれるように」としめくくってみせた。この言葉が通訳された途端、群衆のなかから「よそ者のテーマはなんだ」という質問が飛び出す。ゼンはまるでその問いをひきつぐかのように、よそ者がディヌーでくらししていくための二つの注意を披露する。「よそ者は村で争いごとをつくってはならない」「よそ者は、村の若い娘をやたらに求めて騒動をおこしてはならない」。あとの方の忠告につられて、群衆がヒューヒューと歓声をあげるのを見とどけると、ゼンは不意に険しいつらげがまえに変わり、きつ、とした面持ちでよそ者を身据える。その両手がよそ者にむけて広げられ、ある抑揚をもった言葉が、たたみかかるように強くくりかえされる。ウ・トー・ヌスラ、ウ・トー・ヌスラ、ウ・トー・ヌスラ、ウ・トー・ヌスラ・ゼンプ。広場をかこむ村びとの誰もが、一瞬、動きをとめる。「おまえの名はヌスラ、おまえの名はヌスラ、おまえの名はヌスラ、おまえの名はヌスラ、ゼンの息子」。この瞬間、ダンの国でのマジマは消失してしまう。以後の2年間の最後まで、それによってのみダンの人びとにひろく知られ、語られ、呼ばれつづけることになるよそ者の名、それがこの日の「ヌスラ：新しい技術をたずさえてきた者」だった。

ゼンは、なおもしばらく、何事かを村びとたちにしきりに説いていた。だが、ようやくにして村入りをはたしたその朝のよそ者には、あえて通訳されなかった村長の言葉など、聞きとる能力はもちろん、それを気に留める余裕すらない。

3

しろ膚の若い男が一人、ディヌーに来たそうだ。そいつは、しろ膚のくせに村に住んでるそうだ。おい聞いてくれよ、しろ膚がヌスラと呼ばれてるんだとさ。ちがうって。ほんもののしろ膚だぜ。ディヌーに立ちよった周囲の村びとたちも、それぞれの村で、この納得しがたいできごとを、同胞への格好のみやげ話として語っていく。当のヌスラの小屋には、毎日、村びとのだれかしらが「ヌスラ、おはよう」「ヌスラ、こんばんわ」などと言って入りこみ、よそ者の様子をじっとみつめながら、長居をきめこむようになる。とくに、子供たちときたら、まるで遠慮というものがない。アフリカ人は素朴でひとなつこい、などという祖国でたたきこまれてきた、実はそれ自体アフリカの人びとに対しこのうえもなく無礼な幻想など、こわれてしまうのにさほどの時もかからず、よそ者は、一番無力な子供たちにむけてもう最初のかんしゃくをおちまけていた。「おれの食っている様子がそんなにおかしいか。よそ者の食べかたがおかしいとって啜うガキどもは出てけ！」。飛びあがって一目散に小屋を駆けだしていき、そのいくつもの黒く小さな背中を目で追いながら、よそ者はじぶんの心根の貧しさにきづかされた分だけ、かえって子供たちへの腹立たしさをつのらせる。ただ好奇心で近寄り、こわれたフランス語を使おうとする、罪もなくまた遠慮もない子供たちとよそ者ヌスラとは、その後の数日、互いに互いをそれとなく避けあうようになる。

その日、ヌスラは朝から体調をくずし、手足のだるさや頭痛に加え、かなりの腹痛もおぼえていた。気が張っていた日々のむくいが、とうとう今になってあらわれたのだろう。容易に絶えそうも

ない村びとの来訪をきょう一日はさけるため、ヌスラは後見人のヴィトーに、病気だからこれからしばらく眠ると告げた。小屋の扉を閉めきり、すこし安心してうつらうつらしていると、正午近くになりヴィトーその人が扉を強くたたいてヌスラを起こす。「病いのときに、陽が高くのぼっている時分まで、小屋のくらがりて寝ていてはいけない。外にでて息をしなないと、体はよけい悪くなってしまふ。これから畑に行くところだから、ヌスラもあとから来なさい」。流暢なフランス語で戸外からこれだけを言い置き、彼は畑に向かったようだ。念のため体温計を脇にあてると、液晶の数字はもはや尋常でない。頭がもうろうとしていたからなのか、この土地の病氣観がそうならばそのとおりにすれば治るかもしれないと、ヌスラは思ってみる。ふだん誰よりも気を配るヴィトーが、確としてここまで言うからには、なにか考えがあつてのことかもしれないとも、ヌスラは思ってみる。よそ者なりに意を決し、村から畑への道をゆっくりたどりだすと、炎天下でゆらゆらする道のはるか後ろから、ヴィトー一家の少年がひとり懸命に走ってきた。ようやく追いつくと、息をきらしながら隣りに並び、病人に歩調をあわせ始める。こんなときに限って来やがった。あのくそガキもの一人だ。「場所がわからないだろうし、ヌスラが。畑に行くならついててやれって、父さんが」。それだけで少年はだまる。ヌスラは、もとより話す気力もない。だから少年もよけいにだまる。二人ともだまる。ただただ道を進んでいく。病人の息切れは、だんだん激しくなっていく。もともと開きなおつてしたことなのだから、体温はもう何度になっているか知れない。苦しむよそ者もまた、ぶざまでおかしкаろう。嗤えよ。暗い感情に動かされるまま、ヌスラは隣りの少年を横目でうかがう。ちょうど自分も隣りをぬすみ見ようところらへを向

きかけた少年の汗まみれの顔は、だがどうしたというのだ、今にも泣きだしそうにゆがんでいるではないか。そんな顔にでくわし、あわてて前に向き直るそのはずみに、よそ者の口が動いてしまう。「名前はなんていうんだ?」「ぼく?ぼくはボウミ」。

少年はそのとき、病人の苦悶に幼い心をただ揺らせていたのかもしれない。だが道行きのその一瞬、本当に心が揺らいだのは、おのれを恥じねばならなくなった、実はよそ者のほうでこそなかったか。

4

どうも仕事はかどらない。ダンの村々を統制しているはずの秘密結社の姿が、杳として見えてこない。ディヌーには、となり村ブアグルーに住む「王：大結社長」の代理人がいるらしい。女は女で、男装して森からぬつと現れ、角笛をふいて集団で村を練り歩いたりする。だが、男や女の結社組織ばかりか、ディヌーの村史や村名の由来すら、一切の質問がのらりくらりと拒まれる。少しでも無理を通そうとすれば、温和な村びとも一転して感情的となる。農繁期でダン語の学習もままならない。大雨で、村と村とをむすぶ道に水があふれだし、ディヌーは森の孤島と化す。無言の了解をかわしたあの日以来、ヌスラはボウミとその子供組に日本の遊びを教えることで、心にどこかひっかかりをもちながらも無為に時をおくようになった。調査にこだわりさえしなければ、ヴィトー一家とヌスラも、日に日に親しさを増している。

ねえボウミ、森に散歩しに行こうか。ふと少年をさそう気になった、問題のあの日。トゥアクス・ボウミ・アルセーヌ。1976年生まれ。12歳。厳格な父親ヴィトーのいいつけを純真にまもる働き者の男の子。利発な少年。とてもきちんとしたフランス語をつかうので尋ねると、村近くの小学校の30人ほどの学級でいつも一番であることをやっ

白状する、控え目な少年。すっとんきょうな声をあげるのは赤ん坊をあやすときだけの寡黙な少年。ちょっと出っ歯で目はくりくり。うれしい時には本当にうれしそうな表情をみせることができる子。

その散歩のかえり道、くつろぐボウミはよそ者にとんでもない事実を語りはじめる。「ヌスラがね、村にはじめて来た次の朝、集会あったでしょ。あの時ね、ゼンはね、ディヌーの聖なる森とか仮面とか、しろ膚に教えてはいけなくて、みんなに言ったの。これ破ったらね、王さまにね、羊とお金をあげるんだって。でも村のことならね、話していいって……ぼくさあ、この前ちょびっとだけ仮面のおはなしをヌスラにしたでしょ。ゼンが言ったことね、忘れちゃってたの」。

よそ者の顔つきが、このとき、がらりと変わったのを、少年は見ただろうか。村で会うたびに柔和にほほえみかける、村長ゼン。後見人ヴィトーが、ごつい体でよそ者にしめす心づかい。日暮れに呼ばれて飲んだヤシ酒の白さ。よそ者の頭にこれらの映像がつぎからつぎへとながれていく。

5

「今朝ね、あの人、ヌスラに仮面のこと、つい言いかけたの。その時、そばにいた人がね、しろ膚にその話しちゃだめって、ダンの言葉で注意してね、止めたの」「この前ね、大人のひと、ヌスラに話したでしょ、村のむかし。その話ね、母さんにしたらね、そんなのでたらめだって」「さっきね、ヌスラの通訳の人、いろんなこと、伝えてない。ディヌーの先祖がね、森でみつけたカタツムリの数とか、ぜんぜん言ってない」「ゼンがね、ヌスラにむかしの教えたでしょ。あれもうそだよ。だって、後ろにいたおじいさんたち、我慢できなそうに、笑ってたもん」「あの森でね、沼の魚、ぜったい捕っちゃいけないの。ゼンはね、そのこともヌ

スラに教えちゃだめって言ったの」。

よそ者は、連日ボウミの口からでるこれらのことがらを、なるべく気を落ちつかせながら、深夜、書きとめていく。やがてよそ者は、自分がなにひとつボウミから聞いてはいなかったことにしておこうと決める。村びとがヌスラにいてくれているにちがいない心のあたたかみを、自らの手でこわさぬうちに、村を移るべきだと、青空をみあげて考えはじめる。ダン族の村は、どこに住もうが秘密結社と仮面の村だ。次に住まうだろう村で今度はほんとうに仕事を始めるならば、そこでどんな摩擦が起きつづけるか知れない。だがこの村は、せめてこの村だけは、とよそ者は思いはじめる。

6

村入りから34日めの今朝、よそ者はついにディヌーを去る。息子よ、なぜ行く。ゼンはつぶやいているらしい。ヌスラがこれから行くグアカトウオは「王」の住む村だから、きっと苦勞するぞ。ヴィトーはさみしげに忠告する。

ボウミ……別れの前夜、ヌスラの小屋で、急ぐようにはしゃぎまくるその様子は不自然このうえない。ねえヌスラ、もう一回、ジャポンの遊びしようよお。影絵、紙ひこうき、にらめっこ、じゃんけん、指ずもう。まるでこの数週間のフィルムの速まわしだった。気持ちが痛いほどわかった。ねえヌスラ、ほかにも遊び教えてよ。よお、ヌスラよお。たまたまなくなるよそ者は、ききわけのない子を、やっとのことで親もとへ送りとどける。

翌朝の別れまぎわ、ついに糸の切れてしまった少年は、悲鳴をあげながら自分の小屋に突然かけこみ、調査機材が積まれエンジンがかかってしまったトラックの前によそ者をひとり残し、二度とふたたび、その小さな姿を見せようとはしなかった。

(まじま・いちろう/東京大学大学院)